

## 52 香月牛山『老人必用養草』（1716）にみる老人の保養観

中村 節子<sup>1)</sup>，平尾真智子<sup>2)</sup><sup>1)</sup>看護史研究会，<sup>2)</sup>順天堂大学医学部医史学研究室

看護は人間の発達段階（小児・成人・老年・母性など）を対象として現在は関わっている。筆者らは、これまで日本最初の看護書と位置づけられている、江戸後期の町医・平野重誠著『病家須知』を研究してきた。平野は小児・成人・母性（女性）を対象とした看護は書いているが、老人を独立させた項目として取り上げているのは見いだせなかった。そこで江戸時代の老人はどのように健康に留意して生活していたのか、病気をしたらどのような看護がされていたかを明らかにするために、老人を対象としている香月牛山の『老人必用養草』の内容を分析した。

江戸時代初期は貝原益軒著『養生訓』1713（正徳3）年の巻8「養老」のところで老人のことが書かれているが、『養生訓』は庶民全般を対象としたものである。老人を独立してまとめて書いていたものは、香月牛山著『老人必用養草』（国立公文書館所蔵）であった。

香月牛山は1656（明暦2）年、筑前遠賀郡植木生れ。名は則真・字は啓益・号は牛山・貞庵・被髮翁ともいう。曲直瀬道三のまとめた金元医学を主とする江戸時代中期、後世派の第一人者。若い頃、貝原益軒に儒学を学び、豊前中津候の藩医・鶴原玄益に医学を学ぶ。30歳の時、豊前中津候小笠原氏の侍医となり14年間活躍。この頃から貝原家に入出入りして、益軒の妻が重病を患った際には治療に当たることもあり、牛山と貝原家は弟子として、また主治医として深い親交があった。この頃から名医として知られる。小倉藩や京都で活躍。生涯独身、75歳で小倉藩医を引退し晩年を過ごす。主な著書に『牛山活套』『牛山方考』『小児必用養草』『婦人寿草』などがある。1740（元文5）年、85歳で永眠。

『老人必用養草』は牛山60歳の時の著作で、5巻5冊、全111頁で縦23.5cm、横16cmの和綴じ本である。第1巻は養老総論、第2巻は飲食の説、第3巻は衣服の説、居処の説、四時の保養の説、第4巻は七情保養の説、形体保養の説、性欲の説、第5巻は老人疾病治療の説と附録として薬方で構成されている。この本を書いた動機として序文に「人と生れ父母より享けえたる形をいいて、疎にすべき世の人身を養う術、かしこからずして命の限りを尽くさぬ事、数ふるになを餘りあり。かような事おもい嘆きて、此書をなん書つらねてるなり」と述べている。

牛山の保養観は「天寿を全うすることである。人間の寿命は殆んど百歳が限度である。昔から上寿を百歳、中寿を八十歳、下寿を六十歳と定めて長短の天寿としていた。天寿とは、父母から受け継ぐ生命力で、上・中・下の寿命を尽くして死ぬことをいう。天下にも代え難き貴重なものは寿命である。」さらに「老後の保養の秘訣の一つは「畏」の一字である。すなわち、おそれ慎む態度を守り、「頼」の一字、すなわち過信を去ることである。「畏」とはすべてに心をつくして自分本位にならず自然の道理にしたがい身を慎むこと。「頼」とは自分を頼むことである」と記している。益軒の『養生訓』が書かれた3年後に書かれており、内容は『養生訓』の「養老」をふまえ、それを増幅したものである。第1巻から4巻までは「養老」の内容を取り入れ、それに中国の孔子や老子などの聖人の言葉や『書経』『素問』『養老新書』などの内容を引用し日本の老人の例なども加え具体的に述べ、さらに5巻は曲直瀬道三の『啓迪集』巻6「老人門」の内容を深めて、老人自身とその世話をする家族や老人の疾病を治療する医療者向けにわかりやすく書き著した啓蒙書となっており、「老人」のみを独立して対象としたわが国で最初の保健医療書と言えるのではないだろうか。

老いは人としては避けられず誰にでも平等にやってくる現実である。老人自身、それを養う家族自身、そして自分自身もやがて老いを迎える医療者自身をも視野に入れたグローバルな視点をもった教えの書であり、漢方医学にもとづいた老人のための保養書であるが、現代の私たちが老いを迎えるにあたって一つの指針を教示していると考えられる。